

物事の変化が、舞台の上の現実としてじかに目にはいってくる。それは映画で写実的な変化を見ることに比べればはるかに強烈です。なぜなら、舞台を見る人は鳥になる必要があり、魚になる必要があり、神になる必要があるからです。また、肉体は自分のままでいながら霊的な存在となる必要があり、さらに、それを目に見えるものとする必要もあるのです。これは映画の世界では通用しません。映画が扱うのは現実だからです。ところが演劇は違う。もし私が天使で空を飛んでいるという設定があったとしましょう。そのときに私の足が本当に床から離れたりしなくても、観客は、私が空を飛んでいるという空想を共有してくれるのです。これは演劇にあらわれる詩情です。そしてこの詩情と、観客の心のなかに湧いてくる創造力とを一定の形で表現できるかぎり、演劇は生き残るのです。観客には、催眠術にでもかかってもらわなければいけないということでしょうか。

P.93 短期集中連載 特別インタビュー

